

『オリオン座からの招待状』

2007年／日本／三枝健起監督作品

消え去る時代が我々に残す 普遍的な価値を感じさせる名画

会員 須田 清 (22期)

『オリオン座からの招待状』
2008/4/21 (月) 発売
価 格：4,935 円 (税込)
販売元：東映株式会社



感動した映画を回想するとき、その映画とともにそれを鑑賞した映画館も記憶に蘇る。

私にとっての思い出の映画館は地下鉄新中野駅近くのオデオン座であり、後楽園シネマ、飯田橋の佳作座、銀座の並木座等である。

いずれの映画館も今は無い。

しかし、浅田次郎氏の「メトロに乗って」のなかにオデオン座が登場し、映画化された場面になつかしい当時の姿でその映画館が出現したのは嬉しかった。尚、阿奈井文彦著の『名画座時代—消えた映画館を探して』(岩波書店 2006年)は今も無き全国の著名な名画座を回想した著作である。

今回、述べようとする映画は、以上の前文からもお分かりのように浅田次郎原作、三枝健起監督、いながききよたか脚本の「オリオン座からの招待状」である。

昭和25年の開館から約50年を経て、今閉館を迎えようとする京都西陣の映画館主夫婦から、西陣で育ちオリオン座に共通の思い出を持つ東京在住の2人に届けられた招待状から映画は始まる。

創業者の兵隊帰りの館主豊田松蔵を宇崎竜童、その若き妻トヨを宮沢りえ、そこに弟子入りして

住み込みで働く映画好きな留吉を「それでもボクはやってない」で好演された加瀬亮が演じる。

映写室で生涯を閉じた松蔵に代わり、やがてトヨと結ばれる留吉との映画小屋での生活がいくつかの名作とともに我々の前に映写され、阪妻の「無法松の一生」は特別の意味のある映画として登場する。

私は宮沢りえさんがどのような演技をするのかという興味から鑑賞したのであるが、この映画は消え去る時代が我々に残す普遍的な価値を感じさせる名画である。特に松蔵・トヨ・留吉の3人が記念写真を撮る場面は、「時代を引き継ぐ」とはどのようなものなのかを深く印象づける。

オリオン座の招待状を受け、留吉と会った2人は離婚の危機を乗り越えるが、その力が西陣の映画館とその館主に由来することを暗示することによって、映画の持つ意味を改めて感じさせるものであった。宮沢りえさんが今後の日本映画の重要な担い手のひとりであることを確信し、老優(失礼)原田芳雄氏の岩にしみ入る演技と、男の生き様を迫力と説得力をもって演じられた宇崎竜童氏に拍手を送りたい。

* 「最近、おもしろかったかった本」と「心に残る映画」は隔月交代で掲載します。